播州名所巡覽圖繪

一

冨小路正三位貞直卿

凡例

一 此書は一國一覽のものにならば摂州より播州に至るの紀行を委曲せり
行程の里数は記さばとつくども巡語は要用の地名まぐも速綿を
一 官道の左右に見ゆるに間居の名區は大抵二三里をかぎりて本文に
連續せるに山濱の標を以て分てり
一 寺社并に名所古説等の迂曠奇僻は其に実否を紀し妄説に似る
はこれを竊闕を但古書印板に載る曠諸流俗の夜話佛説等は
姑志さりひに圖して一点に付ふ者あり
一 名所苟に変しるゆゑは稍筆我妻にとつくども其意罄難き者は
古書を参考して其象に弁に
一 古道の名不彰者に混ぜしもの図は今に陸ひ其理は文中に記を
一 文中に式内神社と記せしは延喜式神名帳に載せる古社古宮と
志ばなし

序ノ四

一名高き草木或は石の數などは真の児戯なりとゝへども姑習俗に
法ひて出せり
一佛刹の縁起又は佛像の出現等はまさと其原を暁くせんがゐ
に多くは源人の網に引とし等の數十に七八は除きて記さば
一大坂より播州界川まぐの間道は津國圖會に譲りて文を畧せず
不ありて闕るは補ふ
一出船は雜喉場にあり西宮兵庫明石其程覓き不へ便船をべし
船語の記は後篇に譲りて實に畧に
一播州一國名區甚多し繁多なる小より後篇に譲り姑く此に畧ス

播磨名所巡覧圖會巻之一目録

神武天皇
大物浦
琴浦明神
鳴尾崎
鷲林寺
廣田社
宿河原
芦屋洋
芦屋の里
月をどり松
菟原住吉社
仮殿
神宮寺
雜喉場 後海場
逆橋の松古法
浦の初しま
武庫川
松原山昌林寺
六甲山
西宮蛭子
阿保山親王寺
湯本の薬師
鷲尾山城趾
本居稲荷社
西青木田中
本社屋符男社
大海神
住吉川
大仁村 地里村 佃村
雛波の里
月橋
小松崎
幸寿丸の石塔
角の松原
甲山
月構社
阿保親王御廟
打出の宿
鷲塚
後丸ち美旧栖
山路城趾
表符男社
若宮八幡
灘の浦
神崎 尼崎鎮城
長洲村
猪名
押照宮
感應寺
武庫山
御前沖
金津山
公光旧法
茂栄屋敷
月湯
尼神社
さぐ辺石
處女塚

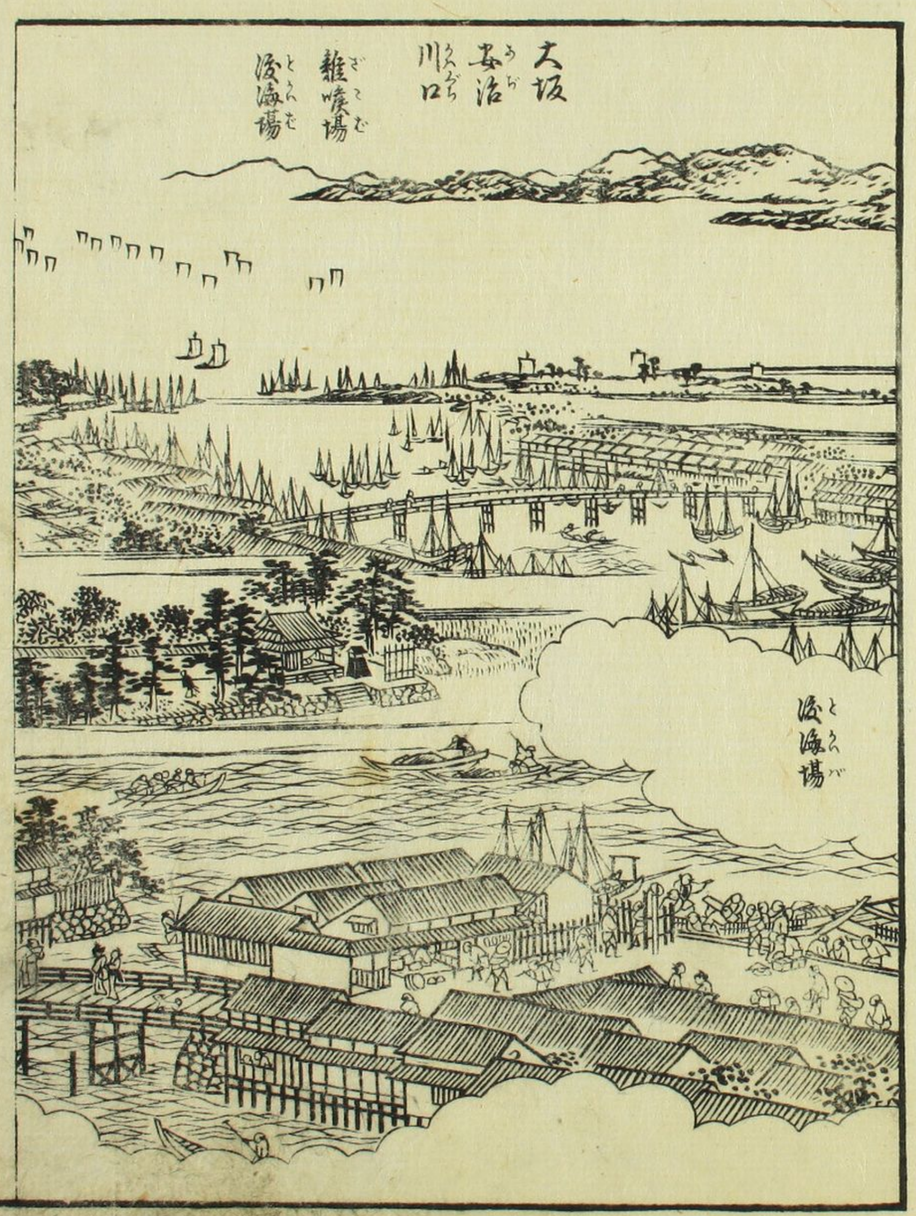
新田義貞戦場　御歌ノ森　御歌乃社 萑ノ松原　御歌石
石屋川　八幡ノ社 二社　私寺　慶龍寺
東明處塚　弓張葉嶽　河内國魂神社　焔魔堂
摩耶山　赤松圓心古戦場　未友天王祠　開田庵
處女塚　敏馬ノ浦　敏馬神社　敏馬古関
脇ノ濱　法然松　阿弥陀寺　生田 日二ノ宮
生田山　生田池　生田 若菜 小野　生田川
生田ノ浦　生田神社　城口標石　梶原二度蒐 二ツ菜石　神戸 走水
小野天神　河原兄弟塚　花熊城趾　三ノ宮神祠
多々部山　大龍寺　古城趾　小原場
山路ノ古城　安養寺　八ノ宮六ノ宮　雪見亭古絃
天王谷　天王ノ社　子多ノ瀧　温泉ノ古墟

一ノ壱

差方塚　敷盛山荘古絃　廣厳寺　楠公碑　湊山
湊川　願成寺　小峯桐局の塔　夏野 日清水
鵯越　會下山　神馬ノ稼　兵庫ノ津
佐比江　經基ノ墓　藥鴻　飛礦
能福寺　真福寺　淪田ノ碑　和田神社
和田三ツ石　燈籠堂古跡　本間金矢溪　和田小松原
内裏跡　福原舊都　真野 芸野浦 芸野池 芸野墨 芸野榛原 芸野絶橋
知章ノ墓　監物古郎ノ墓　通盛墓　木村源吾墓
刈藻川

高砂乃左伊左古乃高砂
遠農邊介多元流白玉
楷玉柳夫母段登佐無
麻之裳加止麻志主佳東

日本紀
神武天皇者彼
國より和國に帰
向いせ給ふ時に一人
の漁翁漁絡を築
き成年の春三月
難波に至る
奪瀬大急
あまをとし
故に浪速
と号く云云


大坂
安治川口
雑喉場
淀魚場
淀魚場

大耶山
六甲山
西宮

播磨名所巡覧圖繪巻之一

所名 大坂 尼ヶ崎より三里 大仁村 野里村 八丁堤 佃村 船渡

所名 神崎 尼ヶ崎より北十丁 天満より一里半

神崎のあま人もろこし浪うちぬいつこより釣人舩ろりね

所名 尼崎 鎮坐 船番所 入口渡一場の濱なり 迷橋松の古跡 町の内 大物浦 尼ヶ崎の濱とつゞく橋町

家のやまあり山本添武種西國下向の附舩宿の石又建武の比秦民文部息所を供奉し

古城圖畑へやらんとせしとそ山すそ城雑よあひし一石あり

所名 浦の初濱 日濱辰巳にあり

昔ぬしもとひえんものうまきていかさ震の浦のそのま 生白

所名 長洲村 日濱尼ヶ崎より八丁

拾遺 人もとゞ後る流れ津の國のうらびとなれや袖そ朽ぬる

所名 雑波里 梅 尼ヶ崎より八十丁ばかり方

雑波津よ咲やこの花冬こもり今いまさくや山さくら 百濱園王仁

雑波津よ咲やこの花冬こもり今いまさくや山さくら 住還よ抜あり山川猪名川ともに歌國考攝那池田川遡とも

猪名 遠川とも 住還よ抜あり山川猪名川ともに歌國考攝那池田川遡とも

もゝろり海濱湊沖川山連奇麗し

所名 琴ノ浦明神 赤穂國村濱鎮座天皇第十二の御子景行天皇の御宇に勅して造営ありし社なり

松風と浪の調る琴ノ浦まかよひ来めや君あそぶこの後なり 仲正

所名 武庫川

むこの浦とまり遥しいそ山も霞ぬ春の夕暮 勝明法師

所名 小松崎 昭和廿年八松村の御名なり 昭和廿年四松小松村と二ヶ村となりし

雑波なる小松が浦よ吹風も波もしづかに春の夕暮

所名 押照宮 武庫川の西小松村より少南小社なれども延喜式に載るの名社なり

年号正月壬午朝日賀正要是夕天皇幸于雑波崎宮云々羅山文集温湯記武庫紀宮

この内よ古宮と称するのハ此紀宮ならん里人旅加その宮と

所名 鳴尾崎 昭和廿年鳴尾浦昭和廿年鳴尾浜と改む

鳴尾浦 万葉歌

摘菜今盛りなり雑波の海を

今日こゝてい都の方の山の端も見えぬ程尾の神よ出々き　実家

松原山昌林寺　津戸村にあり恵心僧都の開基なり　幸寿丸石塔　此石は多田満仲の御女ひぢよ御前の墓の印と云伝ふ

先づ一つ幸寿丸の前と多田よりつゝと申し候と名付三月十日まで池もの名ゝるゝ津門と書く

同誌と名付三月十日まで池もの名ゝるゝ津門と書く

角松原　西の宮の町より二丁ゟ

天乙女いさり焚火の映かくしてゝ津の〳〵松ちら〳〵おもひ乱るゝ

感應寺　津尾村にあり山号広尾山と号す神呪寺とも開山如玄尼本多如意輪観世音弘法大師の御作と伝ふ

弘法の杖寺　武庫の山内にあり山号六甲山と号す開山行基菩薩十一面観世音の像と安置せられしを天正年中結長之放火して伽藍及び宝物四況悉く焼失して今僅に茅葺の堂を結びかけると雖ども

六甲山　武庫の郷村より西北の方にあり高山の峰天皇宝治元年大仏殿の棟木かぐさうて兵と変し三韓降朝を給宝亀元年武内の宿禰をつかはし軍慧と石舞城王及び其人の旅居を造りてゐ給ひ埋む其甲首をうむをもて六甲山と号す

甲山　おふつき武庫六甲の総嶺とをる孔甚湯寺より東北にあり

武庫山　武庫郡

まゝ

そりま給や満ぬくとれが雲むこふさとゝ今ぬりゝ　公朝

廣田社　西の宮より小廣田村南のそなたにあり式に云ふ所謂一座三座廣田神功皇后の御事なり

三十ふさぎ二十二社の内廣田八幡宮神功皇后の御事なり

又一座の説所謂一殿　住吉　二殿　廣田　三殿　南宮　四殿　比咩　五殿　八仙　毎年七月七日神祭あり

山田神宝と出一端人を拝しむ月十八日後の神ゝ氏人を始と祭る遠社とよめる歌

今日まていかくて齢津紗を廣田の神よまもらせ　六条右大臣

西の宮　摂州武庫郡之兵庫より久里半里郡一座　御宮は西の浜　祭神一座　世よ不得四宮　相殿二座　座　大己貴命　右事代主神　日本紀に曰伊弉諾伊弉冉二神の御子天照大神の御弟己よ三歳よりて泣給ふまで御脚立ざるまゝ天磐櫲樟船よ乗せて放棄給ふ山あらしを以て風よ放棄ひかーづきて給ふ西宮よ給ふ

まれなりされば二神のあまの三男と崇めやけとうや海と釈迦と神と為り給ふ

父母いくかと云ふ

又源氏物語にもしの杜の事見えたり

まぐ川海のまろ〳〵ちふれ松のまの星ごとに」年の緑なり

攝社 名次社 綱津社 國田社 須川神社
神奥社は西宮の外田園の中にあり
延喜式に曰ふ攝津國の社八座 名神大 廣田の社 能美 容相の矣 名神大 生田の社 名神大 長田の社 名神大 須佐の男の社 名神大 住吉の社 名神大 海神の社 名神大
天正十九年三月日神祭りの式を定めらる
倫のまろ雨を祈給ひしより諸家名戸を開いて社参詣せり 世俗十日夷詣とて八月十日夷社頭にて参詣せり
正月門松を建ざるの山里の風俗なり ○按ずるに天正九年三月豊徳寺信長公の神事の式今に傳ふ 是を神輿渡と云

御茶沖 西宮の湊邊兒の海ともいふ 神功皇后三韓を平げ給ひて御歸朝の時 御船を繋ぎ給ひし所なりと云傳ふ 今廣田の社則境内にあり 奈良朝の頃迄は海濱の小高き所なりしと云傳ふ 其海邊と御茶沖迄の間 東西凡そ一里餘 南北凡そ半里餘の内 悉く人家にて 殊に賑ひし地と聞ゆ 後世埋立て田畑となりぬ

宿河原 西宮より一丁余西にあり 旧名宿下郡 昔々の在村なり 此邊を今も郡と呼ぶ 是郡山と云しに依て名附しなり ○建武年中 郡山 阿波守國清湯のもり山城より出る陣所なり

阿保山親王寺 御出村の内にあり ○元氏都賀のもと尼馬改宝塔石

阿保親王御廟 右御出の上にあり 年號天皇第二の皇子三品彈正尹繼一品

阿保親王。仁和三年御下向在原行平朝臣須广に配流の

御出宿 兵庫より二里余御影の一村あり

ふりし廟を遷されるよし

御出浦むろ 非功皇后三韓征伐し

給ひて築紫より帰陣し給ふ時第一の皇子麝坂第二忍熊皇子と悪心を

懐抱天皇崩御の後八隅大菩薩 干時第一の皇子麝坂第二忍熊皇子と悪心を

挿ひ軍士を集めて此浦より船を給皇后を船里

なまして南海より巡り帰給ふとなり皇子の軍卒

御出るを見て御出乃

浜も近江なり

金津山 御出村の内の岡山なり 阿保親王此岡山より御ひく金の尾二万黄金一千

両あり 依て埋まれし山里御澤と名附 今三十一ヶ村と称して金津乃

朝日サス入日輝コノ下も金み松尾万松ト云云

芦屋浦　日浦　日浜　俚歌多し　勝ちく

芦屋洋　日浦　日浜　俚歌多し　勝ちく

ほろやの礒の塩やき勝ちくつけの小揃もさしにくふくり　業平

湯元薬師　日本三楽村のうちふあり　摂州有馬郡湯山と云　湯圀の馬の温泉より北へ廻り北芦屋の浦より引通ふくらかむりしの馬　温泉山の傍方日西条郡と云　世伽藍破壊して　○鷹鳥屋山城趾

湯元薬師　日本三楽村のうちふあり　摂州有馬郡湯山と云　湯圀の馬の温泉より北へ廻り北芦屋の浦より引通ふくらかむりしの馬　温泉山の傍方日西条郡と云　世伽藍破壊して　○鷹鳥屋山城趾

今ぞまことくりてむしのねのこるとふ

鵜塚　芦屋川の東御影　近衛院の御源三位頼政矢さけ村薗と云　のとまもあり

化る躰ねよ入もろく西海を流れ芦屋の浦ようれよりて

止まる浦人名をなろく実を握むとふん

猿丸墓　公光旧栖

猿丸墓　公光旧栖

友栄屋敷　古迹村の内にあり　昔芦屋の里及び近郷七百余町の領を藤左

友栄屋敷　古迹村の内にあり　昔芦屋の里及び近郷七百余町の領を藤左

衛門尉兼平の庶子一子月若を伯父友栄が猶子とせし

衛門尉兼平の庶子一子月若を伯父友栄が猶子とせし

お績の身を遺言して終る　率に友栄憑む　て遺跡悪く撲滅

お績の身を遺言して終る　率に友栄憑む　て遺跡悪く撲滅

せり因て月若孤独の身となり　宝明寺入道時敖公諸国を

せり因て月若孤独の身となり　宝明寺入道時敖公諸国を

巡りて貧狼放逸の端緒を禁しむ依て月若を伴へ友栄を

巡りて貧狼放逸の端緒を禁しむ依て月若を伴へ友栄を

紀阿ゝて其邪を改め不義をうくり　業平

業平朝臣假居古迹　此芦屋の里の内に在て業平卿も暫く控慶の事ふり

業平朝臣假居古迹　此芦屋の里の内に在て業平卿も暫く控慶の事ふり

晴る夜の星川逍の景ふも我俗方ふそ芦やのさと小秋風を吹く　友宗

葦屋里　摂津の山

葦屋里　摂津の山

月曜松　松樹を多く植ふる人あり　芦屋神社西ふる五あり　数百年前の物ふり

月曜松　松樹を多く植ふる人あり　芦屋神社西ふる五あり　数百年前の物ふり

芦屋猫荷社　蘆村ふ　祭神　源江村の海辺ふ止る

芦屋猫荷社　蘆村ふ　祭神　源江村の海辺ふ止る

森村の民宅ふより　舞をせり村民昼ゝ舞をせり村ふ

森村の民宅ふより　舞をせり村民昼ゝ舞をせり村ふ

ゝ麦を外乾て民多く幸を握りへふゞり神を迎へ森村

ゝ麦を外乾て民多く幸を握りへふゞり神を迎へ森村

ふ社を建年氏の氏中氏神と崇め祭る　毎年二月卯日　祭礼あり

ふ社を建年氏の氏中氏神と崇め祭る　毎年二月卯日　祭礼あり

西宮　田中　此辺村ゝとふ後の云ふ　傍海辺ゝ湖を汲て

西宮　田中　此辺村ゝとふ後の云ふ　傍海辺ゝ湖を汲て

酒醸ふ　訛ふ　集　狭の河書ふ出ふり

酒醸ふ　訛ふ　集　狭の河書ふ出ふり

ふ九　ふがねをふる都のまふも咲ぬらん我も何方いそ出私ぞ　平忠盛

ふ九　ふがねをふる都のまふも咲ぬらん我も何方いそ出私ぞ　平忠盛

山路城跡 片町より西山の方田の中に松あり此下赤松信濃判官彦五郎則実が籠城の跡なり 月湯

菟原郡 東は寺国より西は生田川南は海中に限りありて北は山中にあり伊勢物語にいふあしやの里なり

菟原住吉祠 住吉村にあり 野寄 郡家 田中 片町 住吉 横屋 魚崎 西五本 むかしこれをまろ呼て山路の荘といふ○社僧西上にあり

祭神四座 天照太神 八幡宮 神功皇后 住吉 摂社 諏訪

住吉表筒男中筒男底筒男の三神は神功皇后三韓を伐せ給ふ時の軍に従ひし御神にて御帰陣の時皇后に海へて荒魂を長門国山田にまつらしめて明年豊浦宮に移し給へりそれより海辺二十二社を勧請し給ふ其は一つなり又大坂の南にまつりしは和魂なりとぞ

○境内に 細石 大海神祠 神宮寺旧跡 若宮八幡 御崎濱 等の名あり

○此村さきより摩耶山の道ありて五十丁斗之○八幡○若林氏宅 妙密柑○五毛天神より蝙蝠堂までの間にあり

住吉川 源は武庫山より流れ続て魚崎にて海に入

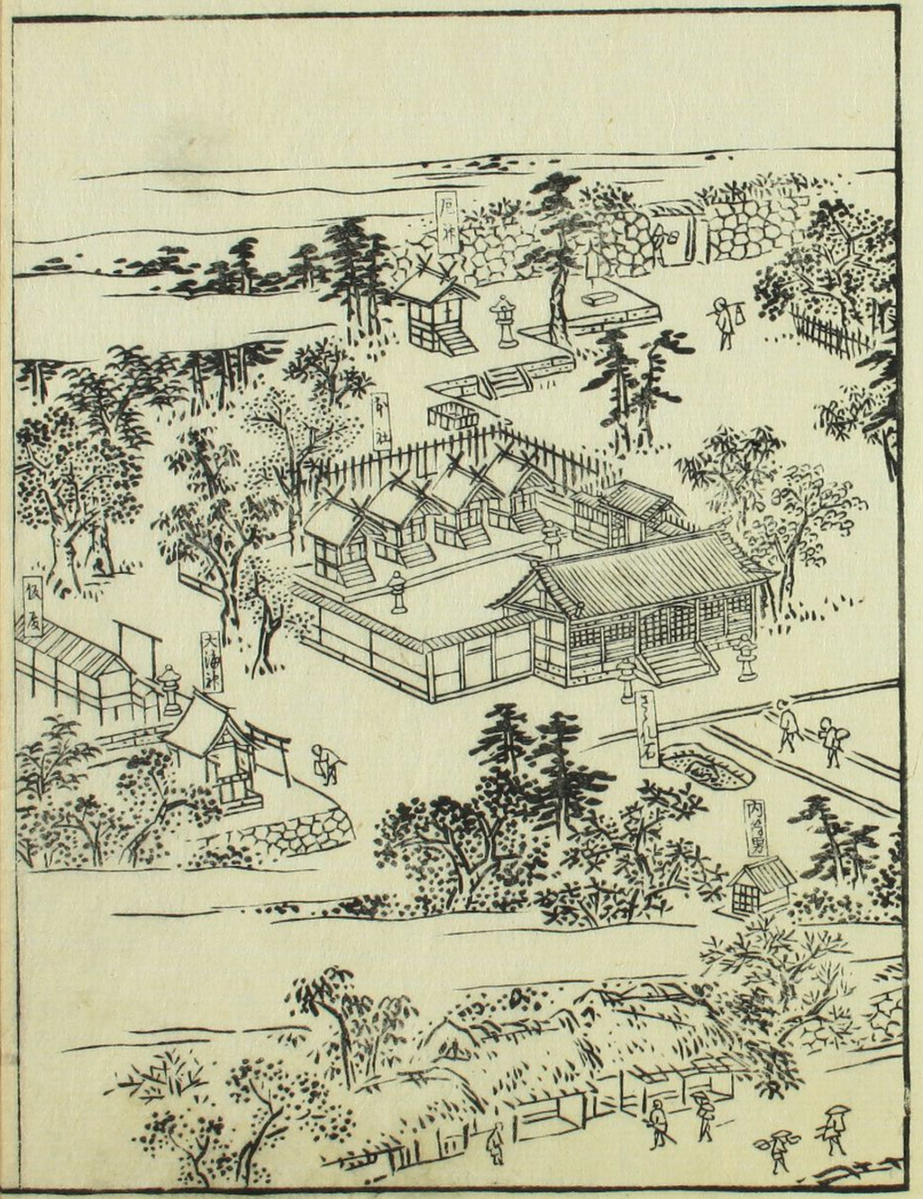
灘の浦 大抵菟原郡の海をいふ 住吉より生田川にいたる里を大灘といふ住吉より西の宮にいたる里を中灘といふ浦口は船を泊るによろしく芦乃やの灘は伊勢物語に出あり郷音の灘は下にある汲の灘干は里なる

六帖 春風のいたく吹らしなごれ海士の釣する小舟さし帰る見ゆ 素性

○我日灘とは其の湍くてはやき瀬をいふは浅きをいふなりこれが家を灘といふは西に淡路島ありて東に川口南に紀伊阿波の鳴戸あり尼崎大物鳴尾西宮や兵庫などより南をさせば淡路紀伊の間トモガシマの二湾より淡路の南浦乃間潮を経て鳴戸にまわる又鳴戸の南を経ぬけて紀州浦の西南をめぐりて東武へまわるなど皆干水の聚るさいはひなれば灘とはいへり

處女塚 住吉の西御田村にあり 此塚三ツあり一は東明にあり一ツは生田川の東味泥にあり各十尺五丁を隔て塚の周囲各八十餘歩之東は西表とし西を東面とし中を南面とし此故をもつて万葉集大和物語に載る所之

大和物語ニ日 むかし津の国にすみける女ありけれを乞ふ男二人ありし一人は菟原の小



菟原住吉

處女塚故事

行田男今一人はいづこの國の茅渟の左手とるんいひける此男とも年の頃無きこち
心さまますぐ同じ事なりければ女押りひきづらひける小女の押や生田川のすてゝる幄
をうちてかの二人の男をよびていふ事う此川に浸て待るあるをなやまもて
ぬ射ぬらん方へなりんといふ男どもいとよれるとこれをあるに一人は頭の
方を射川一人は尾の方を射るかくて心をも何といふべくもならぬとて
住まひぬ我身なりけてん妹の國の生田の川は名のこゝあり
とまゝて此川へ身をなげぬ二人の男もつてきてほし一人身をなげ果押まんぬ
親いとじく悲しくて云上げ葬せまぬ男の押やども皆待人来り此女が塚の侍
塚を作り埋むとれ妹の國の男の押や云事う同國をこそ同所に塚をせめ他の
國の人はいかでか此所の去を犯ぬべきやと妨けるに和泉の親やがていづこより
私すて去をたこび終に埋めける此塚に黄楊の小櫛をうめたまはせつきあり
今の世までも去のうこかりてあるなり云云○此三人の塚なれば味酒をもちぬ男は田
を急原男東明を處女の塚之といふ
○或云いかしへは此ほとりの地名は押しめといひて古き名所之モトメと云は誤りて東明
もタウメまて即押しめの轉語と云るべし万葉に人丸の歌に
玉もかる押しめを通て夜夢の理論がされにいかりをまれど
万葉集處女塚長歌略

をき代よかくうつゝんと舟ら墓中ゝ造り舟さおくこゝろうこゝ造り
おけるゆへよしおてそ〳〵ぬ〳〵も彰義のことも稼ぎきゝつゝも

日及談二首

ゆのやのうひおくゝあが舟さつきとゆうゝみこれが稼のこ〳〵みゝ
日芦屋處女墓をとる海の長談男
ゝ〳〵へのまとゝ舟のこのおきゝひつまこひ〳〵んあ〳〵のやのうひ舟くゝの舟さ
つさとをゝさゝこれゝるゞさ世りかゝりはしゝ 下略
日及談

ゝ〳〵へりさ田男のつまこひ〳〵うひ舟くゝの舟うんきゝこれ
此三ツの墓のゝ又義肉志ゝは三陸と紀〳〵て大馬鞍封之此筒よ古の荒淺うゝ
るを強客矢人偃渚を掃りて遮蹟の文藻をあせりとゝり

新田義貞戦場

楠正成はさんよさんが彰田是利の圍手ひ今を限りとそ又久多ゝ旧方金鈴
を三手ゝ分うを三方より義貞ゝ討てくる義貞勢居神方の軍勢を落延
させんそ小後陣ゝ引さがり返合せ〳〵戦ふれくゝゝとゝ義貞のゝうる馬ゝ矢
七筋まで立ゝるゝ小膝を打て倒さくる義貞求極りよよそうゝて桑梨の

馬を結後人くゝも御方ゝ是をまる者ゝし敵先を元筈て討んとくる小義貞の勢
ゝ薄場」て近くいくゝ及十方ゝより遠矢ゝ射ゝる矢の雨や雹霰の降よりも尚繁く
義貞ゝ主刀二振左右のゝうに抱てさがる矢をは二振のおに
中ゝ射ゝる矢をは二振のおに
王乃敵ゝ矢を遮蔽霰のゝ
遥のゝのようゝ是をんくゝ満
我ゝ小後ゝ立くゝ退くくゝる敵を掛ぎくゝる小勢ゝの敵ゝ元筈ゝて終ゝ討とて
ゞり其間ゝ義貞虎口狭道ゝ終ゝ敵ゝ義貞ゝ智つて討死とゝる中ゝ去年義
貞西國の討ゝ向受給り門
家退捕ゝぐとゝる所藝
ぐまゝ表ゝと桑鞍ゝ深せくゝ
法ゝ犯ゝい戦ひのゝ
狼十石ゝ副てをいう高家其時ゝ感ゝて綸ゝ大将乃命にかゝり武ねくゝる人
ぜんをらんざくんや

名所

御影森　石屋村乃南ゝあり　御影社　神中ゝ
續古今
おとうゞ御影の松を宿ゝうへて神ゝごちとせをいて老うん　基俊

○崔松原

御影石　兵庫築永の二郎の山谷より出て村閭の上流より下海邊の御影村石工ども盛に物を制し猿出ル左右より今石の出る有を御影と称せしは此石名あるに依てなり
あしび西圓寺殿の御影もこゝより出せしと云傳ふ
元村山の海岸ちくさ磯も殊外な悍き石にして奥深く名石や
村より東の半とりけて御影と出せり○石ぶみの用要石とりわけ大雨の時石屋川へ流れ出るの如し
出るの如しと云ふ猿発て悪く九〳〵

石屋川　一名徳井川源は武庫山より徳井を経て東明村より海へ入　八幡社　二社西二ツハ八幡村也天正廿年修葺ル一ツハ河原村より上流より村名を社ル舟寺へ八幡ともいふ

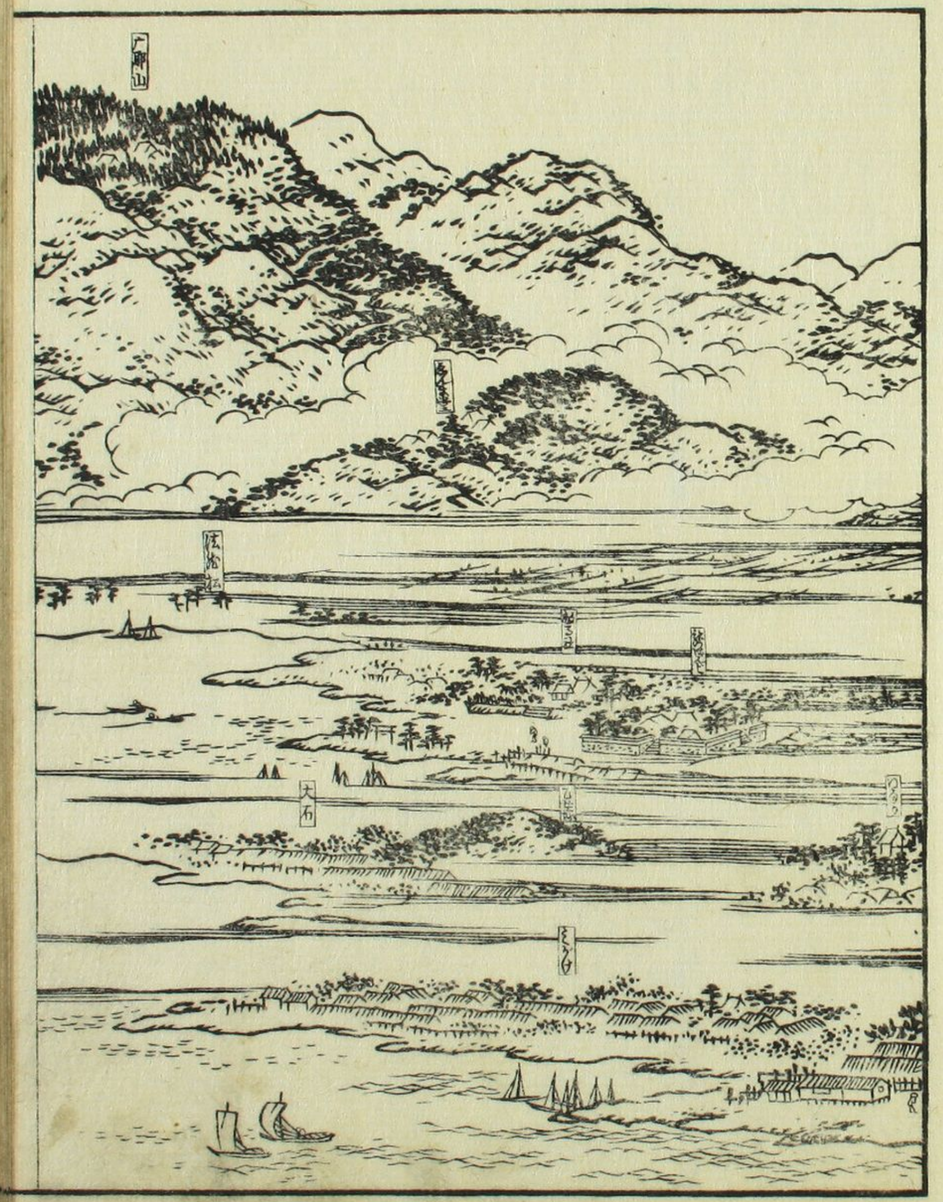
舟寺　一名神宮寺八幡の傍らにあり
天明の頃の古あり
敷本和歌集　舟寺より徳の居く絶よむ所を
こんもりのり初くれど」と舟寺

慶龍寺　篠原村にある摩那天上寺のまた寺なり
家の房何綿ふとうり世よ急ぶの寺ありき
あげ」のことはふとう強てはいとも安けし」と有は名古の古の臣

東明處女墓　こんをそだいつて
東明村のかみありるらん
△弓弦葉嶽　一名都安川源は武庫のこ谷より出て川の西大石村海源より入
大石川　一名都安川源は武庫のこ谷より出て川の西大石村海源より入
河内國魂神社　胡麻生村にあり武内の大社と今ふるも天神とのみ云ひ物系傳ふ
とさまかりこれより摩那の名となせ。

猫魔堂　上坐村にあり広那山より十八丁海道川東面
すりこあり二岩を村すりこあり十八丁

△佛母摩那山切利天上寺　上坐村猫魔堂より十八丁傍石三ツあり七まりをなく二王門より
山頂の佛州一望ふ見おとし大海を周ふあり海路の
ぬのちりのみく村里ハ一握の粟のごとくのぞめり
當山の開基ハ天竺法道仙人ハ
て古義の真言ふ法道ハ元真
相應久米仙人都良香多ふ
ふ〳〵釈迦切利天へのぶ〳〵せ給ひ」ふをふて切利天上寺と号け佛の
母摩耶夫人を安置せ〳〵ふ佛母摩耶山とふ
観音堂　夫人堂の左にあり長一ま十ふる二ま十ふる二間隔檀舎三寺の像を
岡山堂　隔山堂ハ夫人堂の右にあり法道仙人
弘法大師を安置れ
什宝都九面　山下上坐村掌王寺ふ女人
○奥院　二面丹波藤基ふ作ふ納むる所の仏二面ハ今ふ云ふ
○夫人堂　山上の南面ふあり長一ふ釈迦石の脇ふ立ふの像ふ
摩耶夫人ハ釋迦如来の御母ふて天竺迦毗羅施兜國白淨王の妃妻
ふり夫人真心ふると白淨王の国綱を釈て善薩化して夫人の胎


八郎山

鉄馬浦
摩耶山

中に下生現世に生じて衆生を悟さしめんがためとぞ夫人眠寤皆時
の間菩薩六牙の白象に乗て来て右の脇より入ると見へ懐胎十月
満足して四月八日の日始めて出る時夫人園中無憂樹の下に立
て右の手を挙て傘て摘とる時菩薩右の脇より出る時に樹下に
七宝の茎の蓮華を生じ大さ車輪のごとし菩薩此上に堕ちて自ら
行事七歩にして立り大梵天王白拂をおして左右に立ば難陀跋難陀
王優波難陀龍王虚空より清浄水を吐て一温一涼を太子の身に
灌ぐと云

赤松円心戦場 本書より凡又丁ありて二の尾のあるの谷に宝大塩濃場の立てる 本を陣不なりとくへ円心又一説の比は播州の赤にあるべし
円心は播磨備前美作を領して威勢天下に冠たり後醍醐天皇の
勅に應じて此摩耶に楯籠て大敵を引受悉く利あり遂に六波羅
を伐て忠を盡れりといへども元来利を先とし義を後とせしものなれば不
忠にかへりて子孫ほろぶ摩耶合戦は太平記に委し

王子神祠 原田村にあり文明の社記に出よしふ

未友天王祠 うちや村にあり文明の社記にありとぞ

大石村 大石川の西の海邊 此里酒造多し

開田庵 うちや村にあり 庵に元亀三年の日記あり又法華経あり其跋に曰く
應永二十一年中元の日功畢ぬ貞和三年五月廿六日東山の卜笈叢書
に授く康永三年二月中旬正六位弾正忠藤原朝臣師範施入 津国志

處女墓 味泥村にあり三墓の一つなるかといふ

敏馬浦 石屋村脇濱八田部の海濱に亘れり

万葉 玉もかるみぬめをすぎて夏草の野嶋がさきに舟ちかづきぬ
野嶋は淡路にありて此浦に向へりこの歌拾遺集に敏馬をとしまと
せしは誤りて淡路に同名あり敏の字と通ず

新続古今 敷めし里のあるべも向ひてみぬめのよそに人は波かる 定家

敏馬神社 岩屋村の林中にあり松林は灘ぐ今三社と称し岩屋大石味泥の三社神 延喜式八田部郡汶売神社とみえり此社は元來
勢郡敏馬山にいませしを神功皇后船を遊りて功ありしは此神の加護なりとて此
ところに祭りたまへりく浦の名となるといへり

敏馬故関 山岩屋村にあり 此関摂津志に載るもこれ古歌みるもなしこの姑らく従ひ

所名

生田浦

古歌 ㊀ふけば生田の浦乃いくたびも心をまどはしてきん 内侍佐

生田神社

生田宮村あり武内の大社之近隣二十町ケ村 ㊁これをまる 七月三十日 八月廿日

系神雅日女尊

爾神八柱

村名宮ハ攝外社あり一の宮ハ村名宮ハ兵庫小湊町六宮ハ坂本村あり

いつ〳〵ハ活田川のことあり て生田長狹國と稱し海上又十狹茅を領ふ古歌

ふるよりも今も村長海上氏とあり て生田

和田の神へ寄りしころり ○武日北一代集に此宮を社又神とも祝ふとも

ひしてゝ森即社のつゝて杜のまの論あり ○祠系出後甚長く波打際に多

年焼ゑを建り森より色まで大抵丁斤皆八本の榊等樣を植へ花の盤

ゐは波のかぶりをひさしに海抵のかぎしを修ふ春先異所より供物あり

城口標石

握拳二度蔓ゞ 生田の三丁西 塚が村より西 平氣

ふ往昔〳〵西ハ一谷を城郭よりま人古

義経を始めし三草より夜討よ平家を打破り生田の杜より東迄分蓬の松

系神殿の松風湯の方より陣を張りて一谷の後鵯ごえを越さんとて丹波より攝へ

こゝを向ひ生田の先陣ハ川系を即兄分芸郎五郎と戦ひ討死を握拳平三

法然松

服洗ふあり法然上人左迄 ○

の時風待ちごの法ゐべし

生田

生田ハ郷名ゟて其まの

ふるを生田川 生田二宮

百歩一石里迄 連隊百歩 ㊁ぬるを生田の池を

生田小野

紡ぐの左右山を分つの今小野坂

姫川百首 読人のなさまざまげる 摘

中尾村の人家

生田川

森 ようゟ東御ゟの川ゟり源の布引の滝ゟり

古歌集 ㊁ゟびぬゟゟをうゟゟ生田の川ゟ

生田山

生田宮村の上方ゟあり一名大竜山

ゟ中ゟ城跡あり甚ご深林ゟり

阿弥陀寺

日村ゟあり法然上人住造

の時やごうぜ給へるぞ

生田池

生田村

慶ゟ三

茶菓

ゟゟ卓多くして摘森

酒

生田社

天照皇神 稲荷 和多宮

雷ゟ宮 脇ゟ 希ゟ天

末社

八幡

坂倉日吉

摂社

住吉

坂倉日吉

生田社
後拾遺
心をば
いく田乃
ありま
かんれども
忘しきま
こそ
志ぬべりり
りり
よこ人志れ

果附先を守て又百騎ばかりを引ひてうしほ次男孝次あまりを先とうけんと勠力を尽す孝三役者を立て後陣の勢のつゞらんを考ひ さうんどりのい勠進み まづくよ大将軍の給ぞとつひに退りさう孝次もづくひくく

武士のたつるたゝかひ迷ひてはいさぎよからぬものぞと弓ひきてはいさぎよく

とゞまらせ給へやと喚ひくうれて孝次討とる者ともそ撫の内へうけのこりぬ源をのこさじと先がけせんとするものゝ

源を討せてく孝三が命何うせんくみせやくくみえて大将軍と源をぞ命と見て

おほしめしうけ取こそ撫ぶ二度の墓とそやうみ嫁孔をうみ

よ源へるゝ墓とべ花の数々れどもうひそ紙よ移りる

吹ゝ花を何てうしうん梅の花散まり附で香いまうまくる

北野天神　中村よあり沿革年中又乗大納言

國綱勅諚よりて生田商神の一つるう

河原兄弟塚　神戸村より三丁余南の中よ塚のもの

松二本ありまり鉄塔の画上よあり

神戸　二ツ茶屋　走水　三村てさゝる所うそたき人家とをべて大社の傍ら氏神そる

花熊撫跡　カウベカンベンなども日ひくまり〳〵神社の神名迎あり

撫の内のもい永禄十丁年織田信長公の浜法として荒末拐津等村

重よ給て家居社口与一兵湯と年ふとを約として一ケ年の内よ為勅状遅るゐ徒るの方

又小のロとも二方之撫ひい西のロと元亀元年荒末志摩守孝村正こんを新う天正三

年まで居撫し志摩守孝村の伯父にる御みづく義州毛利家へ加ろひしより又一名湧ケ年

ま居撫し村同よ大坂門弘義撫のまに分西国の門徒るより兵粮運送とる永

信長公村ロよ給て是をを聞む松軍とぬくれ村ロ村をを後紀州の一揆雑賀孫

市根来の浜辺義花湾門村撫し義る孝を池田信輝入道勝入向ひて合戦を終な

天正八年七月二日よ落撫し今よ其法あり

三宮神祠　かんべ村よあり村中の氏神とる生田八不の内あり

多〻部山　御ろう二十丁余山高波　大龍寺　右の寺よあり三月十八日観音会あり　古義真言宗本

堂如意論観音孝三尺余勅毘沙門　弘法孝　不動堂　稲荷社

の傍孝　奥院大師堂　開迦牟尼　梵字岩　蛇谷　弘法滝　糸撫

やまあり

の滝る落弘法大師奇異の小流あり

○寺記曰神護景雲二年和気清麻呂勅基能の観音仏得て山寺と創造ん

延暦南の年弘法大師宮よ経て又湯と掛く○寛文年中南都招提寺の僧徒賢

正上人再建して今よ及ぶ　○小屋場　熊原より入丁目のとる

古撫　多〻部村孝中宮村よあり五軒より

観應中赤松播よ信濃守範資

梶原二度の蔥

老人雜話云
箙にさゝる矢の数は多くは
二十口之時内一ツは矢から
その結びまで濃に
かゝる付る之二十三は
射すらひて結に一ツ結
さゝが箙からぶるなり
是あはせひ一ツは結ぶ之
多く家物語橘合戦の頃
二十口とし云矢まで敵
二人射ゆとし十一人に
身を負せられば
箙に一ツぞ結り
とりとあるは
是之を後箙も
とひて捨てなり
とは結りし
矢も射すらひ

箙がんづまてく
働きのさりと
なる有るとき
とてとるに
梶原が箙の
梅はまたく
風流にあらず
矢を皆射すら
ひて梅の枝を
さしてゑびらを
笑めるなるべし

多々部山
大龍寺
再山とも云
地蔵
蛇谷

奥院
本堂
不動
方丈

天王溪

烏原

楠正成
同正季
湊川戦死

山語古城 中宮村にあり 高松 高五郎則実の古城 ○大照山安養寺 坂本村にあり 初めは尾張と云ふ 鎌倉山大照亮 尾三の善提所今は境内に尾三の塔あり

八宮六宮 坂本村にあり 生田商神八宮の内之村なれど 六宮は幸の神と稱に例に親書堂あり

雪見亭古蹟 奥平理村にあり 福原の都うつしの時 清盛ここに造るといへり

天王渓天王社 奥平理村にあり 此造りを天王谷といひて丹生の山田より兵庫への尾之道より 多く郡へのぼれば石の横にあれども布引の傳より 紛雖不

子鳥瀧 ことなし川の上石平村にあり 西馬とちなり

石ちしる子鳥の滝にきてこれば 猿行人の所とは見へたり

温泉古墟 石平村にあり 此地縁かきしもの 兵庫の民家にあり

差方塚 荒田村にあり 平家物語りに治承に年六月九日彰都の事始として上 塚に二株の木の 郷宮人和田の松原西の地を照拠して九重の地を割ましたるに上は一条より下は五条 東とありて東より下はなかりたり去御門宰相道親ゆされたる唐去には三条 の廣語を開ひて十二の通門を立て見へたり 況や五条までみん都にあらず門裏 を立ざるべきと云郷一日にゆさ遣しかば平相國不真にそなりましたる云 此時の日本は 此地といふ

平頼盛山荘古蹟 荒田村にあり 清盛の弟池大納言頼盛の中しきにしたり

源通親治承に年三月高倉右上天皇嚴御幸の記にとへたり

五月雨ふりしかばたかさごれ御りにつかせ給ふ都人のくづるにこそ何なるかと上下ある 今申の時に福原にはうせ給ふ今一日も都へとくと上下心の内にはひしひ給ふ福原 の中御覧せんとて御輿にて実彼所御幸あり所のさま作りたる所にこまり どの拝しなるもしてやりとぞ見ゆるにしたりしさとしたる 此の家にて笠りけやぶさめるど はかふまつらせて御覧せさに日くまでくらへらせ給ふ云云

平家物語 治承に年六月三日都遷りあるべきとて安徳天皇来三歳の御時御輿には 御乳母帥亮殿同くめされ郷相雲客ばしめ古政入道も乗らしまたり池大納 言頼盛の郷の宿所は皇后とぬる云云

或曰頼盛は後ち羽院文治元年六月出家して重運といふ

廣厳寺 坂本にあり 警王山と号に 後宗正成の善提所なり 本尊薬師如来 毘沙門天 正成の守 本尊なり

開基は元亨元年大元國使明極也○建武三年五月廿五日楠公 の一族七十二人民屋に入て六間の客殿に二行に並び一日に切腹せし といへり其遺骸を葬りしは今の石塔の地なり○本堂の縁板に書 して曰開山佛日焔恵禅師明極和尚示寂建武三年九月二十七日 楠正成戦死建武三年五月廿五日に十三歳

湊川

楠正成石牌　坂本村四圖の中ニあり永祿に年號戸芽門先國卿の本建ニて家居依ニ本助三郎ニ給ふ石牌は一夜の内ニ湧出ると云ふ

後ニ移すより古三囘の小家ニて堵中石柳ニ圍ニ囘遶二面を残し殘りは悉く埋ニ了ふ

○牌の和泉石ニて堵中石柳ニ圍ニ囘遶二面を残し殘りは悉く埋ニ了ふ

明の徵士舜水のよめる楠正成靈祠先國遠ニとゝろ〳〵うとゝ

大日本史

楠正成ハ河内の人左大臣橘諸兄の裔ニ今剛山の西ニ居て家ニ橘樹多

し因て以て氏ニ以父ハ正康母ハ某氏志貴山ニ禱て正成を生り山神

毘沙門ニ類ある有ニ因て元弘元年後醍醐帝小条高時の兵

を避けて以ニ笠置ニ幸ニ適あり足ニ以て正成ニ召ニ

以即ち兵ニ房をしてこれを徵ニ召ニ遣ニて赤坂ニ幸ニ軟ニ

人と數ニ以此後弥〻又沸湯の如ニ以ニ乱鞭を焼て城を去ニ令剛

山ニかゝるニ及ニ帝深ニ以ニ囲ニ幸ニ赤坂を守ニ不定佛を陣ニ泊

逸の橋ニ隅田高橋の数兵と溺乱ニせ〻其後天王寺ニ至ニ個ニを歎

き未ニ素記湊てニ〻ニ以ニ絶水萬人ニとのニとをニいあり絶ニ小条ニ乞

み及んで帝詹都ニ遷ニ以ニ後ニ延元元年

吳利ニ以ニ民閑を犯ニ以正成字治の天渡ニ出て帝叡山ニ幸ニ以勝ニ乗ニ以て

ニ以民糸師ニ入ニ以ニ及んで後ニ以ニ正成ニ召ニ還ニ以ニ

きまぐれ計策ニ出て後ニ以ニ十人ニ以て注ニ以ニ〻ニ以ニ

義ニ以ニ芸ニ以ニ兵を水陸ニ以ニ分ニ以て後ニ以ニ

ニ以ニ勅ニ以て兵庫ニ出て義貞ニ以ニ

せて軍勢ニ以ニ嶽ニ以ニ

ニ以ニ義貞ニ以ニ遷ニ以ニ若ニ以ニ山門ニ以ニ

附ニ以河内ニ以ニ遷ニ以ニ徵内ニ以ニ

ニ以ニ純ニ以ニ後ニ以ニ

ニ以ニ帝ニ以ニ

む先ニ以ニ及ニ以ニ

○贊曰楠正成の兵を用ニ以ニ

壮烈ニ以ニ

陽を守るい正成赤坂を捨て千破剱を揆ぐごとし韓愈が謂所まづうる百の卒の次第を盡るをゐて百万の勢の日々を源をその師を戦ふ者多寡をゐて無を撃ち奇策を出す窮地を騎を呂渡ひて正成ぐごとくの言い却て勇ひらをざうい天る自万里の長城を壊て敵の勢ひを殺ふるぐごとしゐよゐよ中直の業完しまた而るぐ今し其外宗属をもろを結力戦ひて死してゐ節義を失らび一門不孤忠義乃息うるものいをうる正成の教ふくの致ひと

湊川 兵庫のふにあり和泉丹生の山田東小郡西小郡蔓那小河等の渓川三流合ひて石井村よりうるるの澱らひ下流兵庫の津よりく海よ入也い流あぶく永福よ

ふるの多ぐ〜古へい石井より懐下ふの葉原と西へうぐん兵庫のふの西よう大和田の渡うて海うへ平相國兵庫の築島せうる附結ふの雅を建んうる今のごく川ぐびよりしゑ兵庫の渡よ付て名つけうるるべ〜

湊山 川上鳥原村よゐ名而うるるゆ古歌ありうゑ山ふのふもと蓮坊鳥原村よあり法然上人の弟子住蓮坊開〜

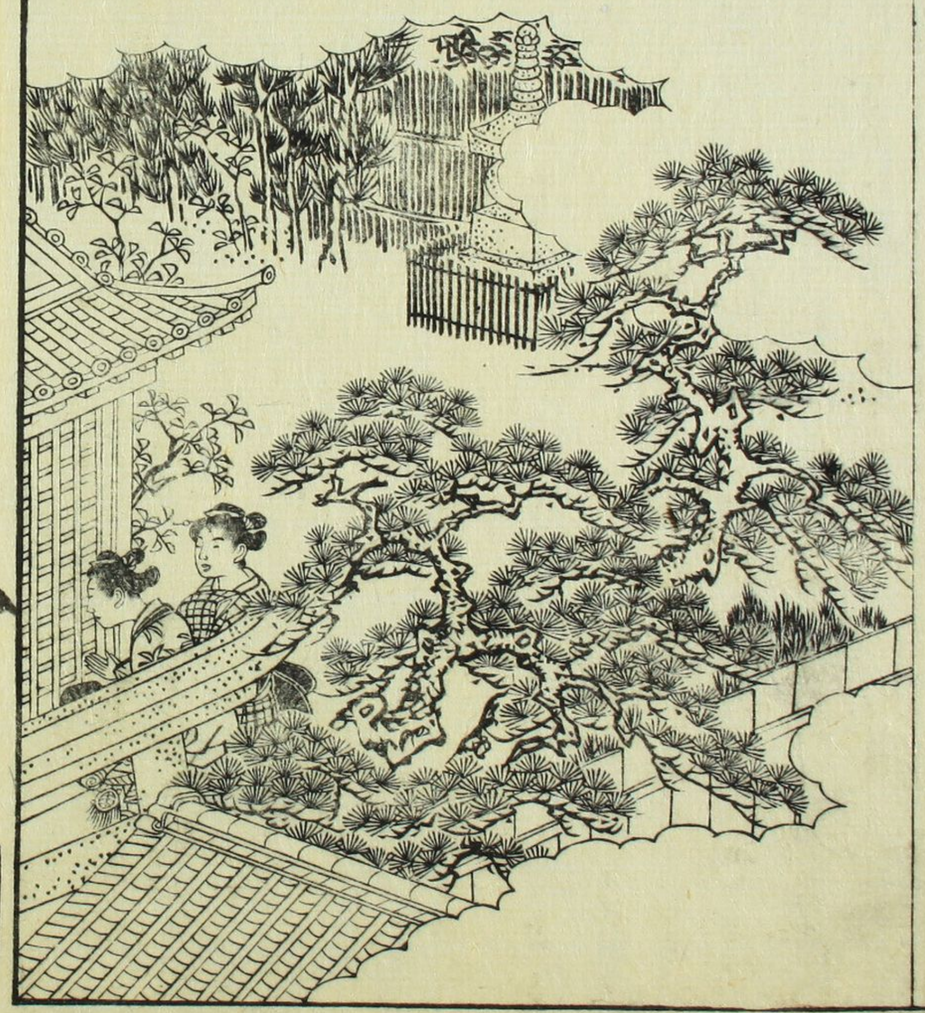
願成寺 住蓮坊鳥原村よあり法然上人の弟子住蓮坊開〜

小宰相局墓 摂州よあり文永刑部卿範兼のむすめ後宇多帝の寵ひ〜ようて妻永三年二月十日出仲よ私よう死をいく今住蓮坊の名い残まり

菖蒲 兵庫の西海岸の内実教郎よ葉神ふうぐり名よ附ふもろ風土記ふゐ也よ牡蠣ありて武家愛を牡蠣ゐ作りて日く脊のとよ多一茎生ずして其よ霜多く積うふ牡蠣をゐ相ひて甘美をもどうい篭幹ふ貫くの相ふ霜の白堪完肉よ塗るの相ふ応つまをゐひて他よ交るゆるうゐれとうさんぐ牡蠣きうぐ〜て絶よ矣よ中る

夢野清水 菖蒲のふもとよあり中古の言ふゐ却て地の雑草等教経の陣不ふうい伝へて清あを陣場の井ととゐうれを汲んて今温泉とし俗呼で永宝の湯ふゐ也い菖蒲の

佐比江



氷室といふ事を或書に誤り加へしとに注ふ人あるなるべし

○或書にいふ義理は此地なるべし志ある小日本紀に慕我理の廉を義理の廉に混じていへる事ありてより此慕我理の慕をつとよく誤りてつげ理といふより氷室の名なるにつけて又誤まり義理は此地にてトガ理は大坂に古地ありつげ理は大和なり氷室は大和のつげ理にあり

鴨鵲 義理より南二丁坂口なり橋慶三本又室への名にかやもく鵲ゆるすをなぞ

會下山 一名延森山といふ兵庫の地にあり巾三丁の平山之延森多中に築出せし事之

神馬稼 和田の地にあり神功皇后三韓より歸朝の御時龍馬を突につるべし事の人稼を貢ぬ此加例により今に山城國男山の八幡宮の神馬の稼は突よりたゞびなるといへり

兵庫津 一名淪田の浦り大淪田武庫の門武庫の浦りといふ兵庫の町名凡十四官の國方南濱小濱の別ちあり繁昌大坂にかまるなりはしむかし兵庫の津は是より西北の山まのまべて濱邊にて町少後もなくして多く漁村船多の住家之諸州入津賣買は天正度なり

大坂に至る者先突に泊る東南の風を除き涯の南百歩許を漕之○此海の底に洲あり長くして蘆原郡深江浦に連る毎年三月潮涸るゝ時洲の洲必ぞ出るなり

天長八年 淳和天皇の時 三月入唐使の船を此澳に泊め津の南の海中に出るといひしは是之これ古人の御誇といひて大和田の古墟之水涯甚深して十二三易ありて船客の畏忌る事之

名つく日まぐれさえを漕ぬのかさよひくやむころ濱風（へうごの事跡之巻）
兵庫とふ人地名のありやう俗傳ふ神功皇后三韓攻の御出てゐ兵具
の庫と爰名ひしにや名ふ号くとぇ云

五日ふついうて文書の表紙に「地名とふるものくわ」即兵庫の地を川にふるとき
む山つきて南へつゞり兵庫いまの海の向ふ○日本紀神功皇后三韓凱陣の御皇后乃舟
まふ雄波さにして紀伊水門より紀淡中ふ巡りて難波ふ還ふらふ今の兵庫の湊
かりべし古書ふ兵庫を武庫と書しもまゝみえ武庫の海ともふそあるべし

湊
住吉の名ものふさうして乃屋せいむこれ海をつゞふ私びと　まん

佐比江　上方ふりの入ふうて　佐比江楼新し

此地彩地ふうて元いさひいはふべし

若狭守経基墓　佐比江指の小ふあり平相國清盛の次男乃
舎弟倫理ふ実経基の次男乃

藥師　一名神ノ鳴　俗ノ訛ふ称ふて藥ふうふ

攝陽奇観
平相國清盛此地を築くふ先ふ天下の宝ふしてふ
ふれぐも末代天下の宝ふしてふ永乃ふ守ふうふ其功実ふ名乃ふふ
と私乃ふづゝふうふ文易ふ築ふうふ
と藥ふうふ乃ふい指波和田ノ岬雑波浦い往還の海門天下運送の要津なり

平家の勢威筑紫國ふ及ぶふふ久ふして清盛ふふりて清盛ふふくふひゞ
久の地ふ考ふふ小津國福原より中國西國の人ふ心ふふりぶふふく
を閉て私治の通治をふとせんとふふ小兵庫い雑波の入にくふ
と入茨木長柄摂津河両國のみ治とふふ」系譜とふれ要害の府城をうま人ふ淀長
干ふりふうふ田畑ふ利ふふ淀川乃みとふふ利せいふ海の往還ふふく
攻内の勢力國天下の宝ふふふ」とふふ是を胸府氏國ふ当國方伐をふり
墜の忠次郎伊賀守ふ門司の茂内ふ紀伊國ふ門司の茂内ふ紀伊國ふ
橋慶紀伊和泉ふ門司の茂内ふ紀伊國ふ門司の茂内ふ紀伊國ふ
科乃の正税ふふふも御ふ舎ふ料の外ふ十ふ一の課役をえて石日ふ私せんと
慶元元年二月八日ふ藥師ふ始ふ一夜ふ一日一夜ふ一附で嘉祥
一夜ふ是を過ふ人ふ方ふ乃ふ八月ふ至ふ三月廿八日ふ一日一夜ふ一附で嘉祥
とを約ふして終ふ私ふをふ
○人指のふい攻攻内の関所いふふ及び三年の孫ふ阿波民部重能
と定ふ人と搦め捕ふ藥師のねとふ」をべてを約ふ人大工服治

石工杣役の者までも其職掌あるものは因て人柱の数に入んと進み出
り猶流させ玉ひ是は全く工役の者に多くうせまじきの計略にして
進み出し因なるよしとふ事諸書に沙汰なし去ど平家物語には人柱の
沙汰ありつれども罪業なるべきとて石に経文を書て築れたりとは
こそ経が島の名も有けれ然れば松王小児のなり縦なる書にもみえず人柱は罪
業なるとて経の功力をかりたるなれば松王がなり実事とはおもひかたし観
房卿の為に人柱となれる心の柱也
よしなしごとにて柱もつようしがたきへざしめやかのゆさかさ
いよく人柱のなり清盛が旨一ツにありて大功は隠しる其功ひとおもしざれバ
何かぬべき附のかうしん実に莫きの諸業之 ○今兵庫の里俗清盛様と
つひろふとふもむべなり

須都久里北風 近国の名産之一説にキフキなり北風の家にのぼむがてきさとふにようさて北風とふなん
竃浦津の旧家にして家属八家月どく北風とふなり又百余年斗相続の家なる
よしいへり家譜あり義貞の感状あり希書に譲りて家に留置ぬ

能福寺 逆瀬川町にあり 天台宗開基傳教大師 本尊薬師如来
中興長盛和尚宗徒横山と号ぬ

観音堂 本尊ハ忍のの御作の
ぐうえ良乃御作の本尊なりとふ

真福寺 俗に附 本尊如意輪観音 江州石山寺のまの本尊とふ事を勧進の連立
ともいふ 祇王祇女堂とし寅に作りありとなり

輪田岬 和田の社より辰巳の方八町斗海面の濱を
築出して並木松数十株を入なり
是兵庫津第一の要所之即清盛の築石西方の風波を防ぎ鳴門の
浪先を除きて宮に一万艘をとどむるなるか之又ハ月を賞して諸客集り
鯨内無双の勝地也今の岬ハ清盛の築し附かは勝まり今に年く
洲崎をのぞりぬ出て長くなる是自然の理あり明石鹿谷に似たり

和田神祠 和田のききにあり東濱の古祢と云例祭又月廿三日
当津能福寺兼帯の末なり

和田三石 和田の社乃南 丸池田中にあり
三ツ石の社ハ和田新田にあり
一名経戸塚とよぶハ古名なるべし新田の社は古地の経戸の蔵之り今海浜につく
なりしものなり三ツ石は大津石の謂なるべし

燈籠堂古跡 本能寺の南和田が岬の内にあり建武の比名氏頼朝よりよる附左馬頭氏頼燈籠堂の古跡にて陣取とも古記に見えたり

増云
六条入道此和田のききに燈籠堂を建て持経者を人集て万燈
会を行ひ法ふ今退轉して石だん乃跡ありと云

東雲集
かげつて和田の岬乃灯は船のこのりみ志哉しうりたり

此燈籠堂のあたりは平家物語盛衰記鎌倉実記るどにみえる所々の名ハ
義貞津る和田の岬にありとは文中にえへそれども仏場の為あらず是いうぞ其功

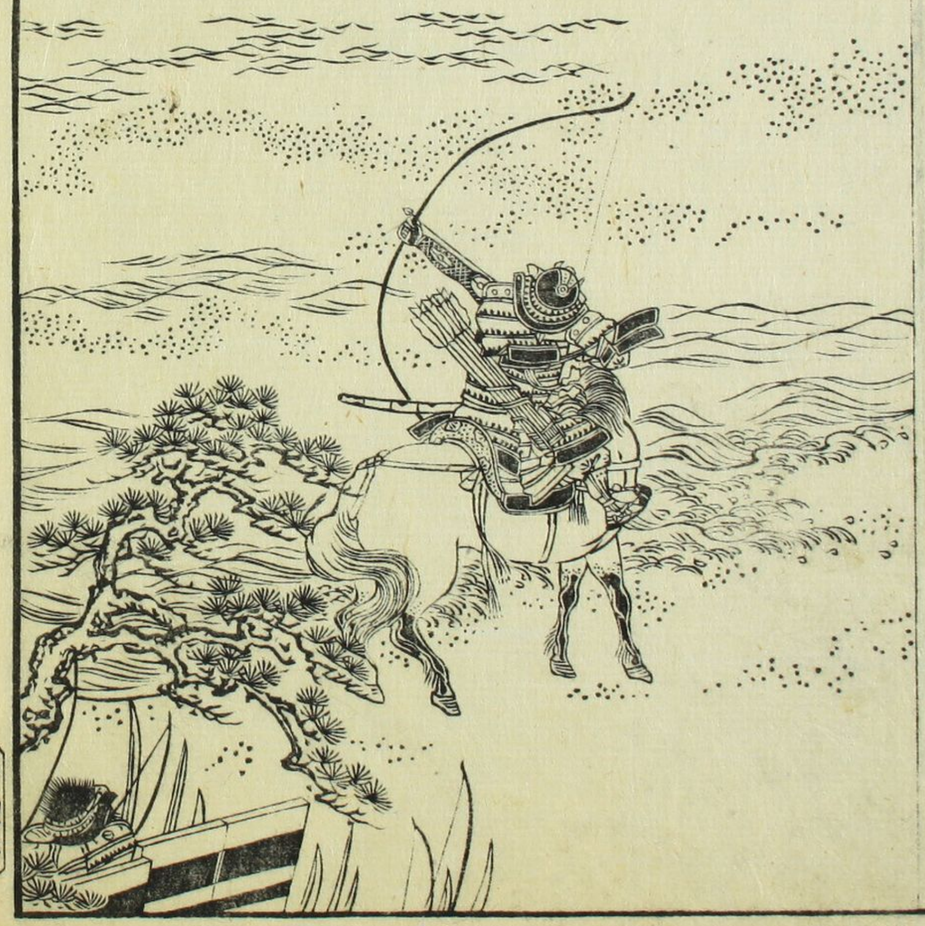
松王小児

其二

和田の岬

并本間遠矢の

上へそ落たり
多歟味方十万
騎神たりしくと
感とる夢天地
とぞ寄かしなる
歟より其名を
易ひなれば此矢
まて名代知り
給へとみ十文来
三ツぶせゆうく
と引まさく
二ツ引両の
船をさして
射なる
其間六丁
金成舩て
ね軍の
船を立
なりしと



和田小松原　東は兵庫の町なづきより西は東屋池村まで一面の松ばらゝ絵系拾津国舎にいへるがごとし

内裏跡　東池屋村松林にあり方に丁あて法溝尚ゆきり○治承に年安徳天皇執政が山荘を皇居として同月九日新内裏に行幸ありいまにする日月来

福原舊都

東雲集

福はしれ古き都を夕ぶりなれちよとしや鳴けるらん

兵庫の地は福原の荘といふ所に是を福原の内裏と云應保年中築造如就の後平相國清盛入道の沙汰として此地に内裏を經營し治承に年六月二日安徳天皇（三歳の御時）此都へ遷幸なる池大納言頼盛の山荘を皇居とし（荒田村に古絵あり）公卿百官悉く供奉し奉とはいへども歎かぬ者はなかりけり然るに九月に至りて諸國謀叛の者ども多きはし訴へければ福原の都もいかゞと思ひ給ひければ十二月二日俄に舊都へ還幸なる志かれども内裏は既に毀ちぬれば皇上を始めまゐり公卿の家もなかりければ只治道に立ちたるべくに方に分散して住せ給ひける○其時既に上皇は淨海が

別荘を宰御所とし法皇は教聖の別荘に押しこめなる是清盛が我侵詔遇するなり

平家物語云都を福原にうつさるゝ後は入道の夏見もなしく或夜一間にたゝるなどの者の面来てのそきなる我入道端と聊まへてなれば消うせぬ又或時は虚空に大勢の者にて笑ふ音幾夜も止ず又或とれば坪の内に死人の髑髏いくらといふ数しらずにちらくて後ふは十日又ぶもみん大頭の目を開き入道をたつこと白眼又馬の尾に鼠巣をくひ子を産むなど種々の物語あり

西行家集　福原人都うつしはしと聞へし法住勢にて月のおもしろく侍りしに

雲のうへやふるき都にあらしけり

○續古事談云上は波羅の大政入道福原の京にて皆くうりあへく後事の外にあどなく後京のみを誘せんとて古京に移りゐるさもなる人とも皆呼ぐしなるに人ゝ入道の心を恐れてたゞうりもいひたりなり長方卿ひとりぞしも心を持ちければ此京をそしりてはも押しまぎ敬ゝにいひなりさてもとの京のよきやうをいひて後にそれ日の後人の定めにより古京へ入るべきれ後に然りにより後に其座にあるべき上達部の長方にあひて相もなきましうまゝなるさばかりの悪人のいはしとしてたてゝる京をさすとこはいかにいはしぞいひ押もむけて帰京の後あればこそいふりなる

たらだらるばいうじ給はまじと云々れば此事我もふまは仰ざる義之入道乃
心よりなりんとくこそさいつひしが其所は廣く漢家本朝を考ふるによりて
ぬ新義を行ひたるものなじめにもひ立をりは人にいひ合をるるまゐし其志も
ざかしくやむ心あるとれ人まは向之先も後京のまゝ外にいつさて後西京の
さたの行ひしかば又此事くやしうありにけりといふまをしりにきされば
かれ言葉を抑しむべきとぞいはまゐる城に其後に人に誡らもんとしける
時も此入道よりまゐりて長方卿は車の外に物を見へたる人之ことやもく
人に語しむべからんとて後と此人を賞せらまゐる人極少給中納言の西京
の定めとなく其時乃人の口にあたり云云

真野　共理浦　共理池　共理里　共理継橋　共理榛原

先第義の古詠多し今東屋池の内に其古名所もありとはいへども実は今さ
を不のことも之人にもしべく此兵庫の古地より西の廣きなどあべし然るに諸書
國名の混雜多し殊に安蛙抄には

共理浦　共理入江は　近江　共理の榛原は　大和
共理の渡の継橋は　椹州　共理の萱原　陸奥

かく悉くしるしぬるまゐまたがひ給るなり

○先第義集第三

高市連黒人歌二首

まきもこに猪名理はこせ川名須山角乃松原いつかしめさん
いさ子ともやまと人にて白菅乃共理の榛原手折てゆかん

黒人妻乃答歌一首

白菅の共理の榛原ゆくさくさ君こそ見らめ共理の榛原

先にて津のくにあるまゐ明らかに黒人は大和の都の朝の人にて任によりて津國に往来
乃答なりゆくさくさは往還の義之

義義

共理の浦乃渡の継橋にて詠ゆもしふやいもがゆめにしある

日

共理の池の小菅を笠にぬはばして人のとふ名をたれへき抱朝

荒武荒刺史平知章墓　屍池村の小上街道の南側にあり討死の所は小の山手なりしが享保
年中並河氏松津志編集の時にて巡行し此のごとく石表を立て
又に代にて討死し給ふ其英名を賞し西海道往還の側今の地に移に
往来の行人家居監物太郎と共に其忠孝嘆せしめんかためなりといへり　知章は新中納
言知盛の子之知盛一谷落城によりて須へ向ふにて落給ふ児玉堂先
に追付近付て打てかゝれに新中納言危く見へ給へば御子武蔵守
知章中に沮り引組で馬より落て名て推へ敵の首を掻切不へ又敵乃

童ども落重りて終に知章を討てげり又知盛の侍監物太郎ハ其ハ童を討て腹掻切て義死を遂る其紛れに知盛ハ井上といふ名馬に打乗り就その沖
朝監物が自害おちくと見て海上三丁斗游で船に乗り給ひて落らされる

監物太郎頼賢墓

知章が墓の小田中にあり是も亜河氏の建る所

頼賢ハ知盛が侍にて御子知章討れ給ひしが落合童どもの首を切て忽ち主君の敵を報ぐ御首に童どもの首を引さげ馬に乗んとせしが馬の腰節を射られて今ハ為しとて引取りき切て死したり

越前三位通盛墓

知章の墓の少東の松にあり本塚也或書曰盛衰記云越前三位通盛ハ湊川の掾を下りにて落られしが木村源吾重網と組で討れ給ひし由とあり又平家物語ニ云通盛卿ハ山の手の大将軍にて坐しけるが其勢皆落失て討死せられしとあり小宰相の局の話に君ハ今朝湊川にて討れさせ給ひぬと皆云ふかへり按津志に平通盛墓ハ佗比江池の東山にありと書り今此所を弱ふ小尖ゆかしけれバ或書曰平家物語の文によりて書る也とぞ云ふ袖あとにつゞくむかしの湊川ハ山の麓を巡りて佗池村の東に流れて海に入る故に通盛卿の墓も佗比江にありけれバ

木村源吾重章墓

通盛墓の側池の中にあり源氏の武士近江国の住人木村源吾重章ハ平通盛と組て終に討死しけるよし平家物語に見えたり

苅藻川

右塚の西御道の小川也○源平時代より長田を経て佗池の末にて海に入る

平家物語

平重衡湊川苅藻川をも打渡り蓮の池を右手に見て駒の林を左手に見て板宿須磨をもうち過て西をさして落給ふ

播磨名所巡覧圖會巻之一終